

校正著書

神道書

附錄

解説

神道、朱子學の二つを兼修し、その門下六千人に達すと言はれた山崎闇齋の近世思想史上に於ける位置の大なる事は今更特に述べる迄もあるまい。而して山崎闇齋の研究が我思想史上に於ける最も重要な基礎的研究の一つであるに拘らず、從來その研究の割合に等閑に附せられて居た原因の一つは史料の蒐集の困難にあつた。即ちその遺著の刊行されしもの垂加草全集と垂加文集あるのみで、しかもその流布が極めて少い爲である。

垂加草三十卷附錄二卷は植田玄節が磯部昌言、淺井重遠、梨木祐之、桑名松雲等の助力を得て編纂する所、文會筆錄二十卷十五冊を卷十二より二十五に收め、遠遊紀行、再遊紀行を卷四に收めて垂加草全集としたものである。之と垂加文集を比較するに垂加草の垂加社語、藤森弓兵政所記、本朝改元考、庚申考、魯齋考、倭鑑目録、九九轉旋圖說等は文集に見えず、而して續文集に見ゆる土津靈神行狀、歸全山記等の文詩及拾遺に收めてあるものは垂加草に見えず、この度出版されし山崎闇齋全集はこの兩書を中心として編纂されしものである。

勿論本全集は闇齋の遺著と稱せらるゝもの全部を集録せるものではないが、その重要なものに於ては大體遺漏なきものと言ひ得る。尙續編下卷に池上幸二郎氏の著書全部にわたる解説の存する

事を附記する。(菊版正續五冊、日本古典學會發行、定價各六圓五十錢)(清原)

繪具染料商工史

大阪繪具染料同業組合編

此書の編纂は大正十四年大阪繪具染料同業組合の手によつて計畫せられ以來十有二年の歲月と編纂委員長森山勇三郎氏以下十一人の努力を経て漸く完成したものであり略々二千五百頁に及ぶ大冊である。

題して繪具染料商工史と云ふ。即ち從來見るが如き單なる同業組合誌の如きものでなく近世資本主義機構の下に活躍しつゝある同組合が「驛つて過去の業績を回顧し現在の自己を認識して將來の方針たるべき意圖」を以て編纂されたものである。記述の時代は近世株仲間發生時代より現在に至る間を中心とするが可及的にはそれ以前にも時代を遡るべく努力せられ亦此書の性質上當然其舞臺は大阪を中心とするものであるが猶京、江戸等諸國の事實に一應目が届いてゐる。

第一章は先大阪郷土史の概観より説き起して近世に於ける繪具染料及其關係業者たる灰屋・膠屋等に關する歴史であり、第二章は同時代の大阪阿波藍商の記述に費され、第三章は明治維新後外國貿易の開始によつて變革せられた業界に就いてであるか、其初に於いては特に中世以來の染料交易の變遷が顧られてゐる。第四章以下第七章までは現代の業界殊に化學染料工業に關するものであ

るが其内、我國と密接なる關係にある外國の斯案が考察せられてゐるのは周到なる態度と云ふべきであらう。最後の第七章は同組合の最近の行事誌であつて、それ以前の歴史的記述とは稍趣を異にしてゐる。

以上の各章に互つて其記述内容は多分に壓縮を餘儀なくされたとの編者の言葉にもかゝらず、頗る詳細を極めたものであり、亦最近の社會經濟史的研究論文をもよく参照せられた跡が伺へる。然も記述の根據たる史料を煩を厭はず一々引用してゐる事は讀者をして安んじて其記述によらしむるであらう。

但餘りに詳細なる爲煩に過ぎる點がある事は避け難い。例へば第一章に繪具仲間について述ぶるに當つて繪具其物の詳しい解説の存すが如きは親切な態度ではあるが、稍煩雜なる感がないでもない。従つて業界全體の歴史的動きを統一的に概觀し得ない憾みがあるが(殊に徳川時代に就いて)「史料そのものを出来る限り詳細に紹介すべき意圖の爲、且つ編纂終了の後必ず尙幾多未見の史料に偶目すべき機會あるを思ひ態と概論的説明を回避した」との編者の言もあるから亦止むを得ない事であらう。(菊判二四五四頁、同組合發行、定價三〇・〇〇)(高谷)

支那と佛蘭西美術工藝

小林 太市 郎著

(東方文化學院京都研究所)

文化交流の現象、それは史學研究上最も興味深く且亦重要な問

題であるが、支那が古くはセレス・セリカなる名のもとに遠東絹の產地として西方に知られ、或は陸路よりし或は海路よりして間接乍らも東西交通の開けるに應じて次第にその文化の間にも相互に影響するものがあつた事は既に屢々論じられた處であつた。併しこの文化交流の事實に於いても、それが極めて濃厚密接なるものを示す様になつたのは十五・六世紀以來歐洲より極東へ海路の直接開けてよりこの方であつた事は言ふまでもない。然るに此方面の研究を見るにその事情は極めて跛行的なるものがあつて、西洋文明の東方への感化が直接之に關與する我々に取つては極めて著しいものがあつた爲かその研究も精しく進められて居るのに對し、西洋文明に對する東方よりの影響に關しては顧みらるゝ處少く、一般に自己の文化を自負する傾きの多い西歐人に於いてこの方面の研究の乏しい事は言ふに及ばず、我が國にあつても僅かに後藤博士の「支那思想の佛蘭西西漸」と題する論文等あるに過ぎない事情のもとにある。然るに著者は本書に於いて、著者が親しく目前にし觀察せられた所の工藝品なる物自體に即し、又文獻を參照しつつ十八世紀を中心とする佛蘭西の美術工藝に於ける東方よりの影響を明かにし、更にその線に沿ふて之を内界の大局にまでも及ぼされたのであつて、前記の如き學界不振の中にあつて多大の努力を拂はれつゝかくの如き興味あり、重要な研究の分野に對して一步を進め、學界將來の發展に資せられた事は大いに感謝しなければならぬ處であると考へる。

以下本書の内容に關して其概要の大略を記するならば先づ、